

研究タイトル: ベルクソン哲学研究



氏名: 永野 拓也 / NAGANO Takuya E-mail: nagano@kumamoto-nct.ac.jp

職名: 教授 学位: 博士(文学)

所属学会・協会: 日本哲学会、日仏哲学会、日本ライプニッツ協会、西日本哲学会、筑波大学哲学思想学会

キーワード: ベルクソン、物理学、数学

技術相談  
提供可能技術:

**研究内容:** ベルクソン哲学による数理的な認識の批判をめぐる研究

19世紀末から20世紀初頭にかけて著述を残したアンリ・ベルクソン(Henri Bergson 1859-1941)の哲学理論について、数理的な科学的認識との対峙を通して形成され、数理的な科学的認識の背景を探る思想として研究する。この方面でのベルクソン哲学の研究は近年、フランス本国をはじめ日本でも活発化している。当該研究も微力ながらその一部をなす。

**【研究書】**

・単著

『ベルクソンにおける知性的認識と実在性』、2011年(北樹出版)

最初の著作『意識の直接与件についての試論』、続『物質と記憶』、そして『創造的進化』という三つのベルクソンの著作をめぐって、数理的モデルによる認識についての、ベルクソンの批判的考察を検討し、数理的モデルを形成する注意力の働きが、ベルクソンにとって核となる実在性と深く関わることを確認する。

・共著

『合理性の考古学』:第六章「ベルクソンと特殊相対性理論—物理学的表象と形而上学的実在性—」、2012年(東京大学出版会)

ベルクソンが1922年の著書『持続と同時性』において、特殊相対性理論と自らの時間論・持続論とをどう対応づけようとしていたのかについて検討した。『持続と同時性』を中心に、特殊相対性理論のような不変量の保存を特徴とする物理学的表象に実在性を認めるための哲学的な構図を、ベルクソンが追求したことを指摘する。

『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する—拡張ベルクソン主義の諸展望』:第三部第五論文「関係と偶然—『物質と記憶』をめぐる「持続」解釈の試み」、2018年(書肆心水)

本論考はメレオロジー(部分と全体の関係を取り扱う代数的体系)を踏まえた近年の哲学理論から概念的な道具立てを借りて、ベルクソンの最初の二つの著作(『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』と略)と『物質と記憶』)の読解を試みる。結論として『試論』における予見不可能な時間推移や『物質と記憶』における記憶が、空間的な関係構造と対立する関係的な全体であることを示す。

**【教科書】**

『変容する社会と人間』:第7章「技術者の「誇り」と「開かれていること」」、2014年(北樹出版)

大学生向け哲学・倫理の教科書。各章において現代社会のさまざまな変容の倫理的問題を哲学的な観点から考察する。担当箇所では、社会的な対立や抑圧の彼方を展望するベルクソンの倫理思想と、技術者の社会責任や誇りの在り方との接合を試みた。4年生の「科学技術と現代」で使用。授業では自身の担当箇所にとらわれず、技術開発の倫理的問題の哲学的な観点から問う諸章を取り上げている。

**提供可能な設備・機器:**

名称・型番(メーカー)	